ペルー金環日食速報

大越　　治

★ グッドタイミングの日食

ままあることだが、大勢が注目する皆既日食がある年は、もう一つの金環食は忘れられる運命にある。今年４月29日の南米金環日食もその例に漏れない。

だが、金環日食が起こるのはちょうどゴールデンウイークの初めだ。通常では土日を含めて７日間の休暇しか取ることができない地方公務員の私にとって、少し余分に休めるチャンスである。多少旅費が割高になるが仕方がない。日食は日程のしょっぱなに置き、あとは昨年の日食の折り、十分に見ることができなかった遺跡巡りの計画を立てた。

今回の日食帯は南太平洋から始まって、昼頃に南米大陸のペルー北部に上陸し、ブラジル北部のアマゾン流域にほぼ沿って進む。大西洋に出てすぐに、日没とともに地表を離れることになる。天文学的・気象学的条件ばかりでなく、交通の便からも生活条件からも、観測候補地はペルー北部になる。私たちはペルー北部のピウラを観測地に選んだ。昨年から日本で開かれている「シカン文明展」の遺跡の近くである。

94年の夏から旅行社に依頼して、現地の宿泊の確保と情報収集を行った。宿泊と交通手段はあっさり決まったが、日食に関する現地情報はそうはいかなかった。旅行社からの問い合わせに対してペルー日食委員会は、「今は11月の皆既で手一杯でそれどころじゃない」と、つれない返事をしたという。まあ、無理もないだろう。

今年になってから、旅行社を通じて、ピウラ大学の構内で各国の観測隊と一緒に観測ができるがどうする、という連絡が入った。第一候補地はホテルの庭、と考えていたので、返事は保留のまま日本を出発した。

４月27日の夕方、11名の観測隊が成田を発った。この日の出発では現地着が28日の昼になる。観測リハーサルはできない。しかし、１日でも休暇を減らさねばならない貧しい日本人にとって、これがぎりぎりの選択である。私を含め数人は、当日の勤務を終えて、または早退して空港に駆けつけたのである。

★ 観測地はピウラ大学

シアトル・マイアミと乗り継いで、28日の早朝ペルーの首都リマに到着。ガイドの大谷さんの迎えを受けた後、すぐに税関で機材持ち込み手続きをとる。あらかじめ大使館を通じて、観光大臣の「この観測隊の通関を妨げてはならん」というお墨付きをもらっておいたのだ。そのため、代表として私のサインだけでＯＫ。荷物はいっさい開けずに入国できた。そのまま国内線の搭乗手続きをし、ゲートで待つ。もう空は明るいが雲行きが怪しい。

小雨の中を乗り込んだB737は、10時20分に無事にピウラ空港に着陸。こちらは快晴である。乾燥していて暑い。現地ガイドのマリアネーラさんの案内でホテルへ向かう。ツリスタスピウ

ラホテルは、コロニアル風の可愛らしいホテルであったが、町中なので観測に使えるようなスペースはない。まず昼食を取ってからピウラ大学構内の観測地を下見することに決めた。

地元料理のレストランでの昼食後、14時過ぎにピウラ大学に着く。担当者が昼休み中だそうで少し待つことになる。バスを停めた駐車場の脇に、タカハシのEM-500に載った15ｃｍ屈折が２台セットされていた。これは昨年の皆既の際にアンコン観測所の石塚所長の所に納められたものに違いない、と思った。一方、校舎の掲示板には、金環食に関する説明やポスター、観測地のゾーン分けの説明図などが貼られていた。そろそろ昼休みも終わりに近いらしく、我々は集まってきた学生達の好奇の目を集めることになってしまった。

授業開始のチャイムが鳴って学生が教室に入ると、日食観測担当の教授がお見えになり、話をうかがう。この大学構内の観測地は、中心線から少し北にずれているが、ペルー各地の観測隊の他、チリなど外国からも観測隊がやって来るということだった。そのうち石塚所長もいらっしゃったが、金環食の詳しい予報などはまだご存じない様子だった。

担当教授の案内で、石塚所長と共にバスで構内の観測地を見て回った。どこでも自由に使ってよろしい、ということだったので、少し奥まった所にあるバスケットボールコートを選んだ。ただ、コートの下には鉄筋が張られているらしく、方位磁針が効かない。赤道儀使用者はコートの東側の道で、使用しない人はコートで観測することにした。

午前中は快晴だったが、この頃になると空には一面の高積雲が出て、太陽の形も定かでなくなっていた。電源を用意しようか、との申し出はありがたかったが辞退した。ただ、コートの場所の緯度・経度・標高を調べておいてもらうことにしてホテルに戻った。

この日は30時間近くの旅で疲れているので、ゆっくり休んで明日の準備を、と思っていたが、日食Ｔシャツを買ったり、メンバー一人一人が学生新聞の記者のインタビューを受けたりと、結構忙しく過ごすことになった。

★ ハデハデの金環日食

４月29日、日食の当日。６時のモーニングコールで外を見ると、見事な快晴だ。中庭に面したレストランで朝食。新聞売りの少年が、我々の写真が載っている新聞を持って売りに来る。当然、みんなで買いあさることになった。

８時過ぎにバスで出発し、ピウラ大学の例のバスケットコートに行くと、なんと学生たちがゲームをしているではないか。しかし我々がバスを降りるのを見て、すぐに場所をあけわたしてくれ、さっそく観測準備が始まった。コート脇には立て札が立てられ、そこにはここの緯度・経度・標高がしっかりと書かれていた。10時20分に観測開始の予定である。日差しが強くなりそうなので、まず日焼け止めクリームを塗ってから機材の組立にかかる。

大学構内なので一般人は入って来ないのだが、地元の新聞やＴＶの取材、学生新聞の取材、大学職員やその家族の見学など、けっこう対応が忙しい。そのうち、学長主催のセレモニーが

あるので手が空いた人は出てほしい、ということになった。しかたないので宿谷さん・山口さん・山崎さんにお願いして、大谷さんと一緒に行っていただいた。その間に、残った人たちは懸命に準備である。日食初参加で観測準備不要の平井さんが見学者の対応を受け持つが、英語が通じなかったりで悪戦苦闘である。が、出かけた４人はすぐに戻ってきた。どうやら誰も集まらず、この忙しいのに呼びつけるとはけしからん、という意見さえ出たのだそうだ。その結果、学長先生の方がそれぞれの観測隊を訪問することになったのだという。その後、学長先生の一行や市の有力者の方々の一行などの訪問が続き、10時過ぎにようやく観測態勢が整った。

快晴の空の中、予定通りに太陽が西から欠け始め、いよいよ日食観測の開始である。皆既日食と違い、みんな余裕の表情だ。観測の様子がもの珍しいらしく、ギャラリーがひっきりなしに訪れる。一旦観測態勢に入れば比較的余裕ができるので、みんなも和やかに対応している。中でも山崎さんの対応が丁寧なので、回りはいつも人だかりである。私の所では温度計と照度計、そしてデジタルピンホールが人気であった。

正午前、少し雲が出たがすぐに消えて、次第に薄暗く、そして気温も低下してきた。正午を過ぎると太陽高度は70度を越えたが、あたりは日食独特の異様な薄暗さに包まれていく。さかんに飛んでいたトンボが見えなくなり、バスケットコートの南西にある樹木には、戻ってきた鳥たちのかしましい声がする。私のすぐ東の木漏れ日は、みんな細い三日月型だ。いくら緊張感の薄い金環食だといっても、さすがに真剣になってくる。第２接触の10分前には、観測者に近づかないようにと、大谷さんとマリアネーラさんがギャラリーにふれて回ってくれた。

欠けぎわが細い角のようになって、すうーっと近づいてくる。と、初めは角の先端に、続いて中間点に２つの光点が現れた。それらを核に、見事なベイリービーズがずらりと並ぶ。昨年の金環と違ってずいぶん派手だ。ほぼ１秒ごとに撮影するはずだったが、つい余分に写してしまう。そしていよいよリングになった。

さあ、これから６分半もある。あたりを見回すと、観測隊のメンバーはみんな機材にしがみつくようにしている。ギャラリーは日食グラスを目に当てて、そっくり返るように太陽を見上げているが、意外に静かである。少し北に離れたところにある木漏れ日が見事なのを、あらかじめ見つけておいた。それを撮影に行く。警備のおまわりさんが二人、いつの間にか綿貫さんの近くにまで来て、のぞき込むように見ている。食甚で写真を撮り、気温・照度を測り、デジタルピンホールを写して第３接触を待つ。

黒い月が太陽の縁に近づいたと思ったら、いきなりぶつぶつとビーズが現れた。これは第３も相当に派手である。ファインダーで鑑賞しながら撮影を続ける。すっかりビーズが消えると、ただの部分食になった。吉村さんが拍手をすると、引きずられるようにギャラリーからも拍手がわき起こった。これがないと録音に締まりがなくなるのだろう。なかなか巧妙である。

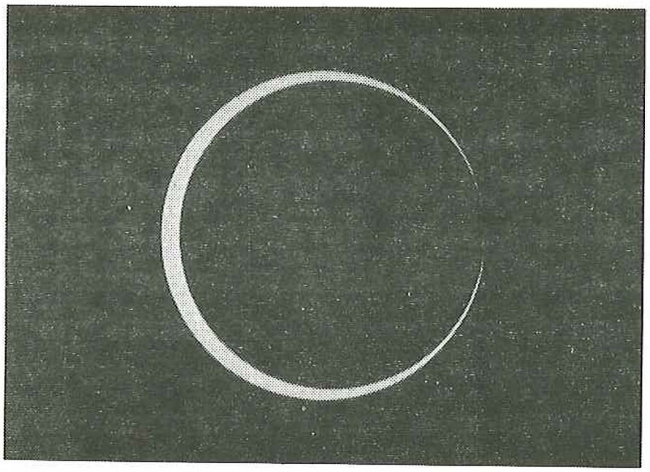
あとはのんびり、予定通りの観測を続けるだけだ。12時半をまわっているので空腹である。ランチボックスとビールを受け取り、いい気分だ。スパイスが効いた鳥がビールによく合う。

再びギャラリーが押し寄せてきた。もう安心して対応できるが、やはり一番丁寧なのは山崎さんだ。説明して望遠鏡を覗かせてあげ、写真を写してあげて住所を聞く。実にマメな人である。やがて昨日と同じような高積雲が出てきた。第４接触まで観測しない人は片付けを始める。ギャラリーもポツポツと帰り始め、あたりはすっかり静かになった。やがて再び雲が消え、第４接触のころにはいい天気に戻った。

★ お楽しみはこれから

ギャラリーが一人もいなくなった中で片付けが進み、全員で記念撮影の後、第一陣は先にホテルに戻った。こまごまとした機材の収納に悪戦苦闘していると、ピウラ大学の担当教授が最後の挨拶にみえたのでお礼を述べる。いろいろな観測隊の世話でお疲れのようだったが、とにかく金環がきれいに見えたので満足そうだった。

最後に残ったメンバーで、ギャラリーの人たちが散らかした紙コップや瓶を片付け、発つ鳥後を濁さずでホテルに戻った。さあ、このあとは待望の遺跡めぐりツアーが始まる！　その前に、夕方にはリマに帰るので、ホテルでの地獄のパッキングが待っているのだ！！



第３接触のベイリービーズ

500mm反射望遠＋テレプラス、　D3.6＋O56フィルター
フジカラーリアラ、　1/500秒